

教宣 せぶん

2 通のメール

第一次転進組が会社を去る6月が過ぎました。7月3日に会社に着くと、一日の行動予定を記すホワイトボードの名前の欄に、間延びしたような空白があり、契約系の仲間が会社を去っていった現実を感じました。提案・通知がなければ、ほとんどすべての契約系は支援金など受け取らず、直募集をする従業員という職を全うできていたかと思うと、やりきれなさが残ります。企業合併を迎え、私たちの運動の大目標は、合併新会社でも社員制度を残すということだったはずですが、全損保を脱退してまで社員制度を残すことに執着したはずが、わずか2年足らずでこういった結末を迎えることに、いまさらながらその舵取りが正しかったのか疑問を感じます。

7月は会社機構の新体制を迎える時期でもあります。この会社の「文化」とも言うのでしょうか、色々な人からメールが入ります。ほとんどが会ったこともない、話したこともない人からの「お世話になりました」メールなのですが、何なのでしょう？ ボタンひとつで誰にでも送信できるので「ついでに出しとけ」という感覚なのでしょうが、顔が浮かばない人から「お世話になりました。新天地でさらに頑張ります」と言われても、心にまったく留まりません。メール文化の弊害だと感じます。

中には返信したくなるメールもあります。旧日動出身者の内勤社員から他支店への転勤に伴って2通のメールが届きました。1通は全支店内社員に宛てたもの、1通は旧日動社員に宛てたものでした。前者にはさし障りのない常套句の文章が書いてありましたが、後者には情緒豊かな文章や苦労した昔話しが書いてありました。「新天地での課所長は自分の他は旧東海社ですが、日動の灯を消さないように頑張ります」とあり、時には労使に別れやり合った間柄でしたが、この時ばかりはエールを送りたい気持ちになりました。口には決して出すことはないのですが、旧日動の内勤社員として、東海経営に対する「怒り」や「不安」のようなものを、2通目のメールの間から感じた次第です。

会社は、7月になっても何も変わらず動いています。6月で会社を去っていった者を、「自ら好んで、喜んで、退職していった、代理店になった」と整理しています。「お願いされて代理店にしてやった」「代理店にさせてくれと言ってきた」と整理しています。しかし、事実がまったく違うことを私たちは知っています。その事実を、これからも私たちは主張していきます。